

原 著

オースティン作品の女友達：Northanger Abbey を中心に

ブラウン馬本 鈴子

＜要 旨＞

フェミニズムでは、女友達の存在は、女性が自立を図る上で重要であると考えられている。作家ジェイン・オースティンの作品では女性同士の“real friendship”は存在するのであろうか。本稿では初期の作品である*Northanger Abbey* (1818) の女主人公 Catherine Morland とその友人 Isabella Thorpe や Tilney 兄妹との友情を中心に、オースティン作品の中で女友達を登場させる意義の解釈を試みた。Isabella との浅はかな友情を通して、彼女の狡猾で浮気的な本性が露呈されると同時に、主人公の〈単純〉〈純粹〉〈未熟〉な性格が強調される現象を確認した。また精読によって Isabella の友情の動機が、Catherine を利用して結婚相手を獲得することであることを明らかにした。やがて Catherine の友情は、Isabella から Tilney 兄妹へと舵を切るが、Claudia L. Johnson の指摘“The band of good friends is all related by marriage in the end”にあるように、結末では Henry Tilney は Catherine の夫となる。道徳的に墮落した Isabella との友情の終焉と平行して、ゴシック小説の低俗さを悟った Catherine が、自己成長によって究極の男女愛を手に入れる様子を検証した。Isabella は小説の3分の2でいなくなり、他の登場人物からも読者からも忘れられる。以上の考察から、オースティン作品の中における女性同士の友情には限界があるという結論に至った。

キーワード：ジェイン・オースティン、ノーサンガー・アビー、キャサリン・モーランド、女友達、英文学

はじめに

“Friendship is certainly the finest balm for the pangs of disappointed love”¹⁾ とはオースティン作品の友情に関する有名な引用である。これは作家の死後の発表となったが、実は初期²⁾にかかれた*Northanger Abbey* 第4章からの引用で、未熟なヒロイン Catherine Morland の心境を語り手が皮肉を込めて大げさに表現したものだ。従って、これは作家の本心でもないし、全知の語り手は、真理を述べている訳ではなく、Catherine のように性急で感情豊かな未熟な人物にとっては「友情は失恋の妙薬だ」と言っているのである。ところが、この引用に暗喩される〈友情〉と〈恋愛〉の重要性を熟考してみるとなかなか面白い。Catherine の場合、男女の〈恋愛〉に絶対的な価値があり、それが破綻した場合のみ女性同士の〈友情〉が重要になってくる訳で、男女の関係は

女性同士の関係の上に立つという恋愛至上主義の前提が窺えるからである。この前提を自然と受け止めるか否かは個人の価値観にもよるところであるが、少なくともポストフェミニズム以前に女性の友情が“serve to reaffirm male dominance and the advisability of women’s unshakable allegiance to men”³⁾を目的として登場してきたとする Karen Hollinger の主張や、“One of the greatest aids in making oneself was the friendship of other struggling women, according to feminist wisdom”⁴⁾と書いた Alison G. Sulloway の指摘を彷彿とさせる。

男女の恋愛に限らず、最近では食文化や観光論からなど様々なアプローチで読み解かれるオースティン作品であるが、批評が友情の話題に特化されることはあまりなかった。そこで本論では、オースティン作品の中で女友達を登場させる意義を読み取っていききたいと思う。分析の中心となるのは、*Northanger Abbey*

の女主人公 Catherine Morland とその友人 Isabella Thorpe や Tilney 兄妹との友情だが、必要に応じて他の作品に出てくる友情事情にも言及していきたい。*Northanger Abbey* の物語のあらすじを追いながら平行して 1 章では Isabella との浅はかな友情について、そして 2 章では Isabella から Tilney 兄妹へと変遷する友情について、最後に 3 章では Catherine の自己成長を示す友情について論じていきたい。

1. 浅はかな友情

お金持ちの親戚 Allen 夫妻に連れられて保養地バースの社交界に生まれて初めてデビューした Catherine は Tilney 家の次男 Henry Tilney に淡い恋心を抱き始めていた。再会を期待してポンプ・ルーム⁵⁾に行くも彼の姿はなく落胆していたときに話しかけてきたのが、Allen 夫人の級友 Thorpe 夫人と娘たちであった。Catherine の兄 James がオックスフォード大学の同じカレッジの友人 John Thorpe の家でクリスマス最後の 1 週間を過ごしたということが分かり、Catherine と Thorpe 家の娘たちは一気に打ち解ける。

The whole being explained, many obliging things were said by the Miss Thorpes of their wish of being better acquainted with her; of being considered as already friends, through the friendship of their brothers, &c. which Catherine heard with pleasure, and answered with all the pretty expressions she could command; and, as the first proof of amity, she was soon invited to accept an arm of the eldest Miss Thorpe, and take a turn with her about the room.⁶⁾

更に次章では 2 人の友情について、

The progress of the friendship between Catherine and Isabella was quick as its beginning had been warm and they passed so rapidly through every gradation of increasing tenderness, that there was shortly no fresh proof of it to be given to their friends or themselves. They called each other by their Christian name, were always arm in arm when they walked, pinned up each other's train for the dance, and were not to be divided in the

set; (21)

と語り手はまとめている。友情の成立するスピード感は、後の場面の若者の運転する馬車の速さのエンブレムとなっており、愚かさを象徴している。また、腕を組んで歩くなどして身体で親密さを表現することを友情の証しとするところは、行為者たちの友情の精神的浅はかさの現れとなっている。そもそも両方の引用に“proof”という言葉があること自体がこの友情の胡散臭さを喚起させる。

しかし Catherine は初めての土地バースですばらしい知り合いができたことを純粹に喜ぶ。17 歳の Catherine よりも 4 歳年上の Isabella は、Thorpe 家の長女で Thorpe 家の娘たちの中では一番美しい。ドレス、舞踏会、恋の戯れを嗅ぎ付けること、奇人変人のうわさの話題が極めて得意である。Catherine の反応は、

These powers received due admiration from Catherine, to whom they were entirely new; and the respect which they naturally inspired might have been too great for familiarity, had not the easy gaiety of Miss Thorpe's manners, and her frequent expressions of delight on this acquaintance with her, softened down every feeling of awe, and left nothing but tender affection. (18)

というものであった。Isabella の得意とする話題の低俗さから読者は彼女の人間としての資質に察しがつくのだが、上の引用にあるように、Catherine は“due”すなわち「十分」過ぎるくらい感心して新しい友達を迎えている。世慣れた低俗な Isabella の登場によって、Catherine の〈単純さ〉〈純粹さ〉が引き立つのは、以下の場面も同様である。出会って間もない頃、2 人がポンプ・ルームにいたときに、Isabella は

For heaven's sake! Let us move away from this end of the room. Do you know, there are two odious young men who have been staring at me this half hour. They really put me quite out of countenance. Let us go and look at the arrivals. They will hardly follow us there. (26)

と言う。やがてその男性たちはポンプ・ルームから出て

行くが、Isabella は “One was a very good-looking young man.” (26) と言い、Catherine に帽子を見せるとか、追いついても無視をして男性たちの傲慢の鼻をへし折るなどと言いつきを作り、急いで男性たちに追いつこうとするのであった。語り手はこう締めくくる。

Catherine had nothing to oppose against such reasoning; and therefore, to show the independence of Miss Thorpe, and her resolution of humbling the sex, they set off immediately as fast as they could walk, in pursuit of the two young men. (27)

Catherine の〈単純さ〉と〈純粋さ〉に加え、Isabella の強引さに抵抗できない〈未熟さ〉とが伝わる場面である。また Isabella の方は、“odious young men” と言っておきながら、本心では “good-looking young man” を追いかけてたい浮気性の女性であることと、言動不一致の女性であることが示されている。しかしもちろん、Catherine にはそのことは分からない。Isabella の性格に関して念を押すようにこのエピソードには更に続きがある。後でついに男性たちに追いついた時にも、これから恋人となる運命の James と歩きながらも同時に彼らの気を引こうとする Isabella の様子を語り手は次のように言及している。

James and Isabella led the way; and so well satisfied was the latter with her lot, so contentedly was she endeavouring to ensure a pleasant walk to him who brought the double recommendation of being her brother's friend and her friend's brother, so pure and uncoquettish were her feelings, that, though they overtook and passed the two offending young men in Milsom-street, she was so far from seeking to attract their notice, that she looked back at them only three times. (30)

“so pure and uncoquettish were her feelings” とはもちろん皮肉であり、James との恋愛も想定に入れながら一方で気になる男性たちの方を 3 回も振り返ったことで、Isabella の性格が純粋どころか浮気性であることが再度示されている。Douglas Bush⁷⁾ は *Northanger Abbey* において行為者、観察者としてほとんどの場面に居合わせている Catherine は、経

験に対する反応において誤解が多く、読者の方が女主人公よりも、登場人物たちの行動の真の動機を先に理解できる仕組みになっていると指摘している。また Marilyn Butler⁸⁾ も、Isabella の誇張癖や矛盾した言動を指摘し、読者が Catherine 本人よりかなり早い時点で Isabella の友情の胡散臭さを感知できると指摘している。すなわち Isabella の登場により、長所も短所も含め主人公 Catherine の性格が読者に分かる仕組みになっている。

2. 変遷する友情

次に、小説の中で主人公の自己成長の過程を効果的に描くのを可能にしているのは、Catherine が選ぶ友人関係の優先順位の変遷である。Isabella と親しくする一方、Catherine は Tilney 兄妹、すなわち、Henry と Eleanor との友情も温めていく。Henry へは友情というよりは愛情、すなわち恋心、Eleanor へは彼女の優雅な外見への憧れと Henry の妹であるという事実が友情を深めたい動機であった。

そんなある日、Henry と Eleanor と朝の散歩の約束をした Catherine が二人を待っていると、Isabella と彼女の兄 John Thorpe、そして Catherine の兄で Isabella に恋心を寄せる James がやってきて、馬車でのドライブに誘う。約束を気にしている Catherine を John は騙し、Isabella も加勢する。そこで Catherine は約束をあきらめてドライブに行くが、John の嘘が明らかになると、約束を放棄した自分を後悔し、Tilney 兄妹に自分が無礼であると思われることを想像して恥じ入った。落ち込む Catherine に Isabella はまったく思いやりのある言葉はかけずに、泥道のせいで約束の時間に遅れた Tilney 兄妹たちを “I never mind going through any thing, where a friend is concerned; that is my disposition” (68) と非難して自分の友情の強さを強調する。しかし一度反省した Catherine は次に、ドライブに誘われたとき断固として散歩の約束を優先させた。Catherine が来なくては自分が James と一緒にドライブに行けないので必死に、そして友情まで引き合いに出して強引に Catherine を説得しようとする Isabella に対して、Catherine は次のように感じる。

Was it the part of a friend thus to expose her feelings to the notice of others? Isabella appeared to her ungenerous and selfish, regardless of every thing but her own

gratification. The painful ideas crossed her mind, though she said nothing. (75)

オックスフォード版 *Northanger Abbey* のイントロダクションを書いた Terry Castle が “Isabella is simply using her [Catherine] to get at her marriageable brother James”⁹⁾ と指摘するように、Isabella の Catherine との友情の目的は結婚相手を確保することである。その意味で、冒頭に挙げた恋愛至上主義の価値観は、Catherine だけではなく、というより、むしろ強い形で Isabella に当てはまる。

*Pride and Prejudice*¹⁰⁾ の Elizabeth Bennet と Charlotte Lucas や *Sense and Sensibility*¹¹⁾ の Elinor Dashwood と Lucy Steele など、オースティン文学に表れる女性間の友情を検証してみると、そのほとんどにおいて友情は男女の恋愛・結婚の問題との比較において重要さが低い。更に、*Pride and Prejudice* では Elizabeth とその姉 Jane、*Sense and Sensibility* では Elinor と妹の Marianne など家族間の姉妹関係においてしか本当に信頼が置ける相思相愛の関係が成立しないようにも見える。例えば、前者の作品では女主人公 Elizabeth には Charlotte という大親友がいる。しっかり者で、頭が良く、もう 27 歳になるこの友人は、結婚についてとても現実的な考えをもっている。そして牧師で将来 Bennet 家の家と土地を相続する Collins 氏が、Elizabeth へのプロポーズに断られると、すぐに Collins 氏に接近し、プロポーズを受け入れる。新井潤美が

・・・結婚はこの時代の女性、特にオースティンの階級の女性にとっては死活問題だった。家がそれほど裕福ではなく、持参金があまり期待できない女性にとっては、何らかの方法で夫と家庭を手に入れないと、将来の生活も保障されない。この当時のアッパー・ミドル・クラスの女性にとって、唯一考えられるのは、家庭教師（ガヴァネス）の職だったが、これはけっして楽なものではなく、最後の砦でしかなかった・・・¹²⁾

と指摘しているように、結婚はお金がないアッパー・ミドルクラスの独身女性の生き残りの方法であった。従って、最初 Elizabeth は経済的理由だけのために結婚する Charlotte を不快に思い失望するが、時が経ち理解はする。しかし共感はない。Charlotte との友情と姉との関係を比較して語り手は、

... Elizabeth felt persuaded that no real confidence could ever subsist between them [between Elizabeth and Charlotte]¹³⁾ again. Her disappointment in Charlotte made her turn with fonder regard to her sister, of whose rectitude and delicacy she was sure her opinion could never be shaken ...¹⁴⁾

と言っている。更に、新婚の Charlotte の家に滞在しているときに、地位も財産も理想的な Darcy からプロポーズを受けるが Darcy の人間性をその時は受け付けなかったので断固として断るのは、この 2 人の女性の価値観の大きな齟齬を露にするエピソードとなっている。ちなみにオースティンは、恋愛相談を受けていた姪に対して、「愛情がないのに結婚するくらいなら、何をして、何に耐えてもよいでしょう。そして彼の立居振舞その他が、彼の長所よりも気になるのであれば、もしこのままそれらの欠点が気に障るようならば、すぐに彼と別れなさい。」¹⁵⁾ と助言している。

後者の作品では 小説の中心人物である Elinor と Marianne たちが身を寄せる Midleton 家の夫人の遠い親戚で貧しい Steele 姉妹が登場する。彼女たちは夫人のお気に入りになろうと子供たちをかわいがったり家具をほめたりして長期にバートン屋敷に居候する。会合を重ねるにつけ、Elinor は自分と親しくしようとする Lucy について、教育不足を気の毒に感じると同時に、“the thorough want of delicacy, of rectitude, and integrity of mind”¹⁶⁾ に厳しい目を受ける。事実、Lucy が玉の輿結婚のみを狙う物欲主義者で、そのため的手段は選ばないことが小説の中盤より明らかになる。そもそも Elinor と親しくなろうとしたのは、密かに昔自分と婚約をさせた Edward の愛が今は Elinor に向いていることを知り、Edward に対する自分の優先権を Elinor に知らせ、今後いっさい彼に近づくなと警告するためであったのだ。Lucy の秘密婚約が公表された後で、Elinor が Marianne に苦しかった心のうちを初めて打ち明けると、Marianne は当の姉自身以上に打ちめされるのであった。

オースティン作品において友情が血のつながった姉妹との関係より重要視されるのは、*Persuasion*¹⁷⁾ における成熟したヒロイン Anne Elliot と Smith 夫人の友情のみであろう。Anne には級友で今は貧しく体も不自由な Smith 夫人という友人がいる。貴族階級であるというプライドばかり高く保守的な家族から

Anne が精神的に距離を置くにつれ、彼女は社会的弱者である Smith 夫人との友情を大切にできるようになる。Smith 夫人は Anne に婚約を迫ろうとしていた悪漢 Elliot 氏の本性を暴露して友人に助言を与える。そして本命の Wentworth 氏とハッピーエンドを迎えた Anne の新居へ家族よりも先に招待される。小説の中での Smith 夫人の存在は Anne の恋愛をサポートする影武者と言ったところである。従って、女性同士の友情はこの肯定的なケースでさえ、男女の恋愛関係の成就のために存在するのである。

オースティン自伝を書いた Claire Tomalin¹⁸⁾ はオースティンと姉の Cassandra の姉妹愛について、Cassandra がオースティンの作品についての唯一の相談相手であったことや、作品を書かなくなったときに誰よりも心を痛めた様子を綴っている。またオースティンの死に際し、Cassandra は

I have lost a treasure, such a Sister, such a friend as never can have been surpassed, --- She was the sun of my life, the gilder of every pleasure, the soother of every sorrow, I had not a thought concealed from her, & it is as if I had lost a part of myself.¹⁹⁾

と手紙に妹への熱い愛情を綴っている。オースティンに友達がいなかったわけではない。Martha Lloyd や Elizabeth Bigg, Catherine Bigg, Alethea Bigg などの近所の友達はいた。Martha に関しては母親を亡くして以降は 63 歳になって結婚するまでオースティン家に身を寄せた。しかしこうした付き合いの中にはいつも姉 Cassandra がいた。Lori Smith は

Perhaps if we had more of her letters, we would know of other close friendships, but it seems like this small group, along with some intimates among her extended family connections, were all she really wanted.²⁰⁾

と推測している。オースティンも Cassandra も結婚することがなかったので、友情や姉妹の結びつきと、恋愛や結婚との重要性において比較を迫られることは実生活においてはおそらくなかったであろう。しかし小説においては、恋愛・結婚における男女関係や姉妹関係を女性同士の友情よりも常に確固たるものとして描いてきた。

本章の最後に Emma²¹⁾ についても簡単に論じておきたい。なぜなら Emma において友情は恋愛の障害とさえなるからである。主人公 Emma Woodhouse は裕福な家庭の 1 人娘で、友人同様につきあってきた家庭教師が結婚していなくなってからは、年下の私生児 Harriet Smith を友人として選び、彼女の縁談を進めようと精を出す。しかし、紆余曲折の末、Harriet は Emma が思いを寄せる Knightley 氏に恋をして、Emma は自分が失恋したと思ひ落胆する。最終的には Knightley 氏は Emma にプロポーズし、Harriet も身分相応の青年と結婚したことから、めでたしとなるが、Emma が友人として選ぶべきだったのは Jane Fairfax であった。Emma は以下のように猛省する。

She bitterly regretted not having sought a closer acquaintance with her, and blushed for the envious feelings which had certainly been, in some measure, the cause. Had she followed Mr. Knightley's known wishes, in paying that attention to Miss Fairfax, which was every way her due; had she tried to know her better; had she done her part towards intimacy; had she endeavoured to find a friend there instead of in Harriet Smith; she must, in all probability, have been spared from every pain which pressed on her now. --- Birth, abilities, and education, had been equally marking one as an associate for her, to be received with gratitude; and the other --- what was she?²²⁾

Harriet とは Emma を慕う年下の私生児で、身分においても教育においても自分に劣る彼女のような相手を親友と選んだことにも Emma の自尊心の高さが多少伺える。Emma と Jane は最後に和解する。友人は自分を映す鏡というが、ヒロインの成長の過程が友人の選択に現れるという現象はすでに見てきたように *Northanger Abbey* でも起こっている。Emma の友情が Harriet から Jane へと、Catherine の友情が Isabella から Tilney 兄妹へと変遷した理由、それは自己成長の証であると言える。次章ではその点をもう少し詳しく検証する。

3. 自己成長を示す友情

Isabella との友情への不安感が生まれてきた Catherine であったが、まもなく、Isabella は James

と婚約し、Catherine は感動する。James は父親の同意を求め、どれくらいの収入が結婚生活に与えられるのかを話し合うために故郷に帰っていく。“my wishes are so moderate, that the smallest income in nature would be enough for me. Where people are really attached, poverty itself is wealth: grandeur I detest” (94)²³⁾ と声高らかに宣言していた Isabella であったが、婚約者が見込みの収入額を提示するとあからさまにがっかりする。そして Tilney 家の長男の Tilney 大佐と公に恋の戯れを楽しみ始める。恋の戯れから始まったものの、Isabella の脳裏には可能ならば James から地位も高く財産もある Tilney 大佐に乗り換えようと言う策略は最初からあったようだ。Susan Zlotnick²⁴⁾ は Isabella が結婚市場の中で自分を商品化するとともに、売り手としての主体的な役割も確保しようとしていることを指摘している。美貌という魅力を武器に、夫選びによって社会的階段を登ろうとする狡猾な女性という点で Isabella は、*Persuasion* の Penelope Clay や *Sense and Sensibility* の Lucy Steel や *Mansfield Park*²⁵⁾ の Mary Crawford と同じである。

ところで、Tilney 家の父親 Tilney 将軍の強い願いで一家の屋敷であるノーサンガー・アビーに、Catherine は招待される。そこで Catherine は、Tilney 将軍が妻を殺したのではないかという妄想にとりつかれる。亡き Tilney 夫人の部屋を物色したことで無礼な想像が Henry にばれ、Catherine は酷く恥じる。バースではゴシック小説を愛する Isabella とその話で盛り上がったが、そうした小説が自分に悪影響を与えたのだと考えた Catherine は、“Charming as were all Mrs. Radcliffe’s works, and charming even as were the works of all her imitators, it was not in them perhaps that human nature, at least in the midland countries of England, was to be looked for.” (160) と学ぶ。“The slow-witted Catherine”²⁶⁾ は現に一番身近な友人であった Isabella の人間性も見抜けなかった。オースティンは *Northanger Abbey* の第 5 章というかなり早い段階で語り手の声を借りて小説談義をしているが、ラドクリフ夫人のゴシック小説などは、“the greatest powers of the mind” (22) が示されたり、“the most thorough knowledge of human nature, the happiest delineation of its varieties, the liveliest effusions of wit and humour” (22) の世界が “the best chosen language” (22) によって表現されるような作品ではないのである。そし

てこれからは常に “the greatest good sense” (161) を持って判断して行動に移していこうと決心する。

そんな矢先に、兄 James から、Isabella との婚約を解消したこと、Isabella はまもなく Tilney 大佐と婚約するであろうことを知らせる手紙が到着する。最初は大切な親友 Isabella の恥になるようなことを人に話すなんて、とんでもないとも思ったが、Henry と Eleanor に打ち明けて話しているうちに、Isabella が単に玉の輿結婚を狙う偽善者であったことを悟るのである。Isabella との友情の終焉に関して Henry は、

You feel, I suppose, that, in losing Isabella, you lose half yourself: you feel a void in your heart which nothing else can occupy. Society is becoming irksome; and as for the amusements in which you were wont to share at Bath the very idea of them without her is abhorrent. You would not, for instance, now go to a ball for the world. You feel that you have no longer any friend to whom you can speak with unreserved; on whose regard you can place dependence; or whose counsel, in any difficulty, you could rely on. You feel all this? (167)

と尋ねる。この Henry の質問は失意の Catherine に対してしつこいようにも思える。しかし、相手の心境を予想してからかうのは Henry の会話の癖²⁷⁾ であるとも言えるし、Isabella の正体を早々と見抜き、Catherine との友情の動機にも気がついていた Henry は、自分の妹の Eleanor との友情こそ “real friendship” (123) であるべきだと信じていたので、Catherine に Isabella との友情が過ちであったことを悟らせたかったのであろう。Catherine は “To say the truth, though I am hurt and grieved, that I cannot still love her, that I am never to hear from her, perhaps never to see her again I do not feel so very, very much afflicted as one would have thought.” (167) と答える。その後、Henry たちの予想通り Isabella と結婚するつもりなど毛頭なかった Tilney 大佐に遊ばれた挙げ句に捨てられた Isabella は、Catherine の理解と援助を得るために手紙を送ってくる。Catherine は、

So much for Isabella . . . and for all our

intimacy! . . . I see what she has been about. She is a vain coquette, and her tricks have not answered. I do not believe she had ever any regard either for James or for me, and I wish I had never known her. (176)

と言いつつ。Henryは“*It will soon be as if you never had*” (176) と言って慰める。CatherineのIsabellaへの気持ちが完全に吹っ切れたこの箇所を最後にIsabellaや彼女に関する情報が小説に登場することはない。Catherineの成長はゴシック小説からの脱却であり、Isabellaとの友情の終焉に体现される。多くはないけれど堅実な収入の見込みがあったJamesとの結婚の可能性を失い、もともと結婚の可能性がなかったTilney大佐は去って行き、少なくともバースでは評判を落としたIsabellaが、今後どのような人生を送るかは読者の想像に委ねられるところである。その後の物語の関心はCatherineとHenryがどのように結婚に至ったのかという点に寄せられ、先ほど引用したHenryの予言通り、Isabellaは小説の3分の2くらいで、登場人物はおろか読者からも忘れられてしまう存在である。²⁸⁾

ところでIsabellaが結婚できず、Catherineが結婚できたことを少し掘り下げて考えてみると面白い。なぜなら、CatherineもIsabellaも地位や持参金がない女性であるという点²⁹⁾では同じであるからだ。現に、IsabellaとTilney大佐の結婚の可能性についてEleanorとHenryが厳しいと考えていることについて、CatherineはIsabellaとTilney大佐の関係を自分とHenryの関係に置き換えて、“*if the heir of the Tilney property had not grandeur and wealth enough in himself, at what point of interest were the demands of his younger brother [Henry] to rest?*” (167) と不安な気持ちになる。Terry Castleは

The marriage of Henry and Catherine at the end of *Northanger Abbey* delights us, because both parties have shown themselves to advantage. Henry, by choosing Catherine, dissociates himself from the self-serving patriarchy so repellently embodied by his father, Catherine, by choosing Henry, retains her newly discovered intellectual freedom.³⁰⁾

と指摘している。Catherineの結婚は、自己成長をし

たヒロインに良縁というご褒美が与えられるオースティン小説では自然な流れである。

Isabellaは、Catherineの精神的成長にそって、Tilney兄妹と対極的な存在となる。共にゴシック小説を読み、体や言葉で大げさに友情を盛り上げ、馬車で派手にスピードを出してドライブしたり、ファッションや恋愛、奇人変人の話題しかなかったIsabellaとの関わりとは対照的に、Tilney兄妹とは散歩を楽しみ、絵画の鑑賞の仕方を教えてもらったり、ゴシック小説の世界と現実世界の違いを時として論らされたりする。小説の進行とともにCatherineは失敗を繰り返しながらも特にHenryの導きで自己成長を遂げるが、Isabellaは道徳的に墮落していく一方である。

ちなみにCatherineの自己成長を兄と共に助けたEleanorと、Emmaの理想の友人Janeには面白い共通点がある。それは2人とも秘密の両思いの相手がいいて、Janeに至っては秘密婚約までしていたということである。EleanorもJaneも結婚ができるまでは、人に聞いてもらいたい苦しみを1人で抱えていたに違いない。主人公たちにとってふさわしいはずのこの友人2人が主人公たちに最後まで隠し事をしていたことにも、恋愛の重要性にはかなわない友情のありかたが示されているようにも思える。

おわりに

小説ではIsabellaの登場により、主人公の性格〈単純さ〉〈純粋さ〉〈未熟さ〉が強調されたが、Tilney兄妹との友情に移り変わることに平行して主人公の欠点は克服され、自己成長が成し遂げられた結果、結婚へと至った。

嘘つきのIsabellaが女性同士の友情についてCatherineに語る場面で

There is nothing I would not do for those who are really my friends. I have no notion of loving people by halves, it is not my nature. My attachments are always excessively strong. . . The men think us incapable of real friendship you know, and I am determined to show them the difference. (24)

と言っているのは皮肉である。なぜなら、今まで見てきたように、IsabellaのCatherineに対する友情は、

初めは James を恋人にするため、それから Henry に気に入られている Catherine に取り入って Tilney 大佐と近づくために、そして婚約者 James を取り戻すために、と全て自分の恋人や夫選びをすることが動機となっており、女性同士が純粋な気持で“real friendship”を築けないことを自ら証明してきたからである。

それでは主人公 Catherine を取り巻く友情はどうであろう。初めの章で述べたように Catherine は Isabella という女性を感慨無量で友達として受け入れるが、ゴシック小説の性質と同じように Isabella との友情は浅はかで“real friendship”には値しなかった。Tilney 兄妹との友情については、2章で触れたように恋愛感情が基本となる友情であった。Claudia L. Johnson はオースティン作品の友情について、以下のよう結論づけている。

The band of good friends is all related by marriage in the end, but they are not good friends because they are related --- as conservative apologists would have it --- rather they are good relations because they were good friends first.³¹⁾

冒頭に述べたフェミニズム的に考えた女性同士の友情はオースティン小説では残念ながらまだ厳しいようだ。

引用文献

- 1) Jane Austen, *Northanger Abbey and other Works*. 1818. (London: Penguin Classics, 2003)
- 2) *Northanger Abbey* の執筆年代については数説あり、1798 年から 1799 年とする姉カサンドラ・オースティンのメモ、1803 年とする作者の知らせなどがある。R.W. Chapman, *The Novels of Jane Austen* (Oxford: OUP, 1982) 12, 242.
- 3) Karen Hollinger, *In the Company of Women: Contemporary Female Friendship Films* (Minneapolis: Minnesota UP, 1998) 5.
- 4) Alison G. Sulloway, *Jane Austen and the Province of Womanhood* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1989) 71.
- 5) 鉱泉水を飲ませる部屋。楽団の演奏などもあり、社交場でもあった。中野康司訳：ノーサンガー・アビー。p.27, ちくま文庫。東京, 2009
- 6) Austen, *Northanger Abbey and other Works* 17-18. 以降この本からの引用は引用末にページを記載する。
- 7) Douglas Bush, *Jane Austen* (London: Macmillan, 1975) 70.
- 8) Marilyn Butler, *Jane Austen and the War of Ideas* (Oxford: Clarendon, 1990) 173.
- 9) Austen, *Northanger Abbey and other Works*, Introduction xvii.
- 10) Ibid, *Pride and Prejudice*. 1813. (Oxford: OUP, 1998)
- 11) Ibid, *Sense and Sensibility*. 1811. (Oxford: OUP, 2008)
- 12) 新井潤美著：自負と偏見のイギリス文化：J・オースティンの世界。p. 84, 岩波新書。東京, 2008
- 13) [] は論文筆者の加筆説明である。以降の引用についても、必要に応じて同様のスタイルを取る。
- 14) Austen, *Pride and Prejudice*, 125-126.
- 15) 新井潤美編訳：ジェイン・オースティンの手紙。p. 382, 岩波文庫。東京, 2004
- 16) Austen, *Sense and Sensibility*, 96.
- 17) Ibid., *Persuasion*. 1818. (Oxford: OUP, 1985)
- 18) Claire Tomalin, *Jane Austen A Life* (London: Penguin, 1997) 197-198.
- 19) Deirdre Le Faye ed. *Jane Austen's Letters* (Cambridge: CUP, 2004) Letters 344.
- 20) Lori Smith, *Jane Austen's Guide to Life: Thoughtful Lessons for the Modern Woman* (USA: Skirt!, 2012) 137.
- 21) Austen, *Emma*. 1815. *The Novels of Jane Austen IV Emma* (Oxford: OUP, 1986)
- 22) Austen, *Emma*, 421.
- 23) この発言の最後で、ロンドンなどには住まないと言った直後に“*There are some charming little villas about Richmond.*” (94) とロンドン郊外の高級別荘地の名を挙げることで、贅沢な生活を期待している Isabella の本音が漏れる。
- 24) Susan Zlotnick, “From Involuntary Object to Vountary Spy: Female Agency, Novels, and the Marketplace in *Northanger Abbey*.” *Studies in the Novel* 41 (2009), 280-82.
- 25) Austen, *Mansfield Park*. 1814. (Oxford: OUP, 2008)

- 26) Ibid., *Northanger Abbey and other Works*, Introduction xvii.
- 27) 2人が初めて出会った時も Henry は Catherine にその夜彼の印象について日記に彼女が書くであろう内容を予言してからかう。
- 28) オースティンは彼女の小説の中で、主要な人物のその後について結婚したかどうかなどの情報を普通は少し載せているが、Isabella に関しては全く触れていない。
- 29) Catherine の父は牧師でかなり高収入の二つの聖職録のほかに、独立財産を所有しているが、子供が10人もいるので、娘の Catherine には当然ながら財産も持参金も与えることはできない。一方 Isabella の亡き父は弁護士である。階級的には Catherine の方がやや上であるが、地位や持参金がないという点では2人は同じである。
- 30) Austen, *Northanger Abbey and other Works*, Introduction xxiv.
- 31) Claudia L. Johnson, *Jane Austen: Women Politics and the Novel* (Chicago and London: The university of Chicago Press, 1988) 92.

Female Friendships in Jane Austen's Works:
Focus on *Northanger Abbey*

Suzuko Brown-Mamoto

< Abstract >

Female friendship is considered important as a means of achieving women's independence in the feminist frame. First, this paper questions whether "real friendship" is possible among the female characters in Jane Austen's novels. The focus of the study is on *Northanger Abbey* (1818), one of Austen's earlier novels, but other works are also considered. In order to understand the significance of the female friends in *Northanger Abbey*, a close examination is conducted of the friendship between the heroine, Catherine Morland, and Isabella Thorpe, as well as the friendship she develops with Henry and Eleanor Tilney. Through the friendship between Catherine and Isabella, Austen exposes Isabella's cunning and flirty nature along with Catherine's pure and immature nature. Furthermore, intensive reading enables us to understand that Isabella is using Catherine to seek out her future husband. As the story progresses, Catherine's friendship shifts from Isabella to the Tilneys. As is often the case in Austen's novels in which good friends are rewarded, Henry finally becomes Catherine's husband. In parallel with discarding the friendship with unethical Isabella, Catherine, who comes to realize the shallowness of gothic novels, achieves ultimate love between a man and a woman. In short, the heroine is rewarded for her self-growth. On the other hand, Isabella loses her fiancé and her subsequent lover, who never intended to marry her from the start. She disappears from the novel two-thirds of the way in and is forgotten both by the major characters and the readers. These factors lead us to the conclusion that there are certainly limitations to the bonds of female friendships compared with the more significant matter of love and marriage in Austen's works.

Keywords: Jane Austen, *Northanger Abbey*, Catherine Morland, female friendship,
British literature